

書物です。それは、聖書がこの世界の創造主である神に信頼しているからです。その神は新しさを造りだすことができるということを知っているからです。

今日読みましたイザヤ書六五章には「見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する」(二七)と言います。この新しさには喜びがあります(二八)。失われていくものには喜びさえも過ぎていきます。喜びが過ぎ去る悲しみに飲み込まれてしまうのです。イスラエルは大国に挟まれ続けた小国です。聖書の民であるイスラエルは常に歴史の流れの中に埋もれてしまう瀬戸際に立たされました。その小さな民族が他の大国と違っていたのは天地を造られた神を知っていたことです。彼らが神を知ったのは神と出会ったためでした。旧約聖書は神との出会いの書物です。そして、その出会いは今も続いているものです。現在のわたしたちもこの聖書によって神に出会うことができているからです。

聖書の民が減びなかつたのは、神が創造主であることを知っていたことにあります。神の創造される新しさは、常に新しくなる新しさです。それは、神が創造の初めに「光あれ」と言われたこと、つまり言葉によって新しく造られたことから始まりました。

この言葉による新しさが聖書を貫いているのです。古びることなく失われることなく、錆つくことのない新しさを保ってきている。その新しさによって聖書は長い歴史の中を生きています。それは聖書の言葉を生きて聞き続けた民がいたからです。

言葉というのはただ言葉があるというのでは本当に言葉と言うことはできません。言葉は誰かが誰かに語りかけることで真の言葉になるものです。わたしたちも、あの時、あの人がこう言われたということが大切なのです。

そういう言葉はわたしたちに生き続けます。神の言葉は生きています。生きていることは常に新しくなることです。そして、この新しさは教会によって受け継がれてきました。教会は何よりも、神の言葉に生きるものです。その中心はいつも礼拝にあります。イエス・キリストというお方が、地上に生きて、その命によって今も語りかけられているところにあります。

新たにされるインマヌエル

黙示録にはこの世界の終末について記されています。終末には滅びるものと滅びないものがはっきりします。

黙示録には滅びることなく残されるもの、常に新たにされるものが記されています。この新しさは「神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。」(二一・三・四)と語られる。

預言者エゼキエルは三七章に「わたしはまた、永遠に彼らの真ん中にわたしの聖所を置く。わたしの住まいは彼らと共にあり、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。わたしの聖所が永遠に彼らの真ん中に置かれるとき、諸国民は、わたしがイスラエルを聖別する主であることを知るようになる。」(二六・二八)と預言しました。エゼキエルはイスラエルが滅亡し、人々がバビロンに捕囚とされて連れ去られたときに預言した人物です。

このエゼキエルが語る「神の住まいが彼らと共にあること」が、つまり神が共におられることが受け継がれてきました。それが失われることなく歴史を貫いてきたことを黙示録がはっきりさせるのです。

神が共におられる、これはクリスマススのメッセージです。天使はイエスが「インマヌエル」

つまり「神われらと共におられる」と呼ばれると告げています。

キリストに出会い、キリストに触れたものは、神と共に生き、常に新しく生かされることになる。それは、生涯の中で磨かれ、いつでも新しく光をもたらすものとなるのです。(二〇二二年一月二日 公同礼拝)

クリスマス礼拝説教

揺るぎなき飼いの葉桶

イザヤ書 一章六〜一〇節
ルカによる福音書 二章一〜七節

牧師 高橋 和人

主イエスの降誕はローマ皇帝アウグストゥスによる全世界の人口調査の命令から記されています。アウグストゥスは尊大なるものという称号です。彼はローマ帝国の支配を確立しました。

これは一人の人間が世界の中心に立つたことを示しています。アウグストゥスは救世主と呼ばれ、皇帝への礼拝がなされるようになりました。人間の栄光の頂点を極めた存在でした。彼の命令は辺境のユダヤ、その田舎であるベツレヘムに及びます。アウグストゥスは人間の栄光を世界の隅々に至らせました。

その一方でこの栄光に翻弄される貧しい夫婦がいます。何の落ち度もないにはるか遠くの権力者によって振り回されます。身重の妻を抱えての旅、妻は自分の家での安全な出産も叶わなかったのです。人の栄光は彼らに何の恵みもたらさないのです。

しかし、福音書の視線は人目に付かない馬